

英国作家ジョージ・ボロウとウェールズ語(1)

British Writer George Borrow and the Welsh Language(1)

下宮 忠雄 (T. Shimomiya)

キーワード：ボロウ・G, ウェールズ, ウェールズ語

英文要旨：The present paper is a collection of Welsh words and phrases and short description of things Welsh in indexed form as given in George Borrow's *Wild Wales* (1862). The British writer George Borrow (1803-1881), author of *The Bible in Spain* (1843) and *Wild Wales* (1862), learned 30 European and Asiatic languages, and translated literary works from these languages. He paid special attention to the Gypsy language in England and published four books describing the life and language of the Gypsies. *Wild Wales* is a vivid description of his travels through North and South Wales which he made in August-November 1854, mostly trekking, walking four miles an hour, often through untrodden paths, by making full use of his knowledge of Welsh language and literature which he started to learn at the age of 16.

本稿の目的は英国の作家ジョージ・ボロウ（1803-1881）のウェールズ旅行記 *Wild Wales*（1862）に出るウェールズ語句とウェールズ見聞を紹介することにある。かたわら、英語の語法も二三とり入れている。全体を論述形式にするか、索引形式にするか慎重に検討したが、本文（main body）を検索しやすい索引形式にした。

ボロウは一流作家の中には入っていないが、*The Bible in Spain*（1843）

の著者として知られ、またスペインや英国のジプシーと親しく交際し、彼らの生活と言語を学び、*Lavengro* (1851), *The Romany Rye* (1857) などジプシー関係の著作4冊を出している。

私の興味をそそったのは、ボロウが30言語を習得し、それらの言語からその文学作品を翻訳していることである。1980年夏、私はスペインのビルバオで開催される国際バスク語学会議で発表するペーパー「ジョージ・ボロウとバスク語」を準備していた。さいわい、学習院大学の英文科にはThe Works of George Borrow in 16 volumes (ed. by Clement Shorter. London, Constable & Co. 1923) があり、彼の著作の全貌に接することができた。その第7巻は北欧文学（デンマーク人ホルガー、ダグマル女王、マルスク・スティーク他）、第8巻（北欧文学続き、フリチョフのサガ、バッゲセン、ハイベア、エーレンスレーア、フェーロー詩、エッダの巫女の予言、ベーオウルフ、ウェールズおよび他のケルト文学）、第9巻（ドイツ・オランダ・バスク・フランス・スペイン文学、ダンテ、ギリシア・ローマ、シェンキエーヴィチ、プーシキン、ハンガリー、現代ギリシア、ジプシーの歌、アラビア・トルコ・ペルシア文学）などとなっている。

ボロウは16歳の時Norwichの法律事務所で書記をして生計を立てながら、ウェールズ語を学習した。教師はウェールズ出身の馬丁であったが、より多くをMiltonのParadise Lostのウェールズ語訳（Owen Pugh訳）から学んだ。ウェールズ最大の詩人Dafydd ap Gwilym（flourished 1310-1370）や、ウェールズのシェークスピアと彼が称するTom o'r Nant（1739-1810）の作品に親しんだ。

彼はウェールズ巡礼を作家として独り立ちできるまで延ばした（生活の糧を得るためにLondonのForeign Bible Societyからの派遣員として1833-35ロシアに、1836-40スペインに滞在した）。本書は109章、小さな活字で528頁から成る。得意のウェールズ語を駆使しながら、ウェールズ全土を駆けめぐり、親しく見聞した記録である。そこには作家の紀行以上のものがある。「なんでも見てやろう、なんでも体験してみよう」

と貪欲だ。ウェールズ第1の美しい山 Plynlimmon の中の三つの川 Rheidol, Severn, Wye の水源をたずね、その水を心ゆくまで飲む。家族が汽車を利用する区間を自分は一人で歩き、ウェールズ人と会話することを好んだ。ある時は山間の道なき道を、ある時は沼地をくぐり抜けた。彼は健脚家で、1時間に4マイル(6.4km)を歩き、1日に33マイル(53km)を進んだこともあった。aleを好み、パブを見つけると、必ず1杯を注文した。第1章で妻 Mary (1796-1865) と娘 Henrietta (1817-?) を紹介し、妻を主婦の模範 (she is a perfect paragon of wives) といい、娘は妻の連れ子であったが、いつも娘らしく振舞ってくれた (she has always shown herself a daughter to me, knowing botany, drawing, and playing the guitar) と書いている。

1854年7月27日、51歳の時、彼は200ポンドほどのお金 (a spare hundred pounds or two) を携えて、妻と娘を伴い、Great Yarmouth の邸宅を出発した。Peterborough で1泊、Chester で3泊し、8月1日 Llangollen に到着、ここを headquarters にした。家族とは Snowdon の山まで同行したが、10月21日、汽車で帰郷する家族と別れ、単身、南ウェールズへの徒歩旅行に出発した。11月15日、200マイル踏破に無事成功した彼は、Chepstow の宿屋で最上の夕食を注文し、1等の乗車券を購入し、翌朝4時にロンドンに着いた。

本稿の定本にした Collins 版の Wild Wales (1928) には Cumro and Cumraeg (ウェールズ人とウェールズ語, pp.529-535) の1章が付せられており、ウェールズ語とサンスクリット語の関係を多数の例をもって論じているが、印欧語比較文法的に納得できないものも多い。ウェールズ人の起源がヒンドスタン南部など、とんでもない話である。ウェールズ語がギリシア語よりも古いなどというくだりも、まったく根拠がない。ギリシア語の文献はミュケーナイ時代から数えれば、3,500年の歴史を有しており、ウェールズ語の文献開始はせいぜい9世紀である。ウェールズ語に特有の ll (Llangollen, 人名 Lloyd など) の発音がスペイン語の ll (Sevilla, maravilla) と同じというのもまったくの誤りである。whisky

の原義が「生命の水」(ラテン語 *aqua vitae*) など正しい解釈もあるが。

文献

- Borrow, George (1862), *Wild Wales. Its People. Language and Scenery*. With an introduction by Cecil Price. Collins, London and Glasgow. First published 1928, latest reprint 1978. (本稿のための定本)
- Borrow, George (1862), *Ibid*. With an introduction by William Condry, 64 illustrations by Wil Rowlands. Gomer Press, Llandysul, Dyfed (Wales), 1995.
- Brake, Philip, and Mair ap Myrddin (1994), *Welsh in three months*. London, Hugo's Language Books.
- Buck, C. D. (1949, 1971), *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*. University of Chicago Press.
- Falileyev, Alexander (2000), *Etymological Glossary of Old Welsh*. Max Niemeyer, Tübingen.
- Jenkins, Herbert (1924), *The Life of George Borrow*. London, John Murray.
- Knapp, William I. (1899), *Life, Writings, and Correspondence of George Borrow*. 2 vols. London, John Murray.
- Lewis, Henry (1989), *Die kymrische Sprache. Grundzüge ihrer geschichtlichen Entwicklung*. Innsbruck, Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, 57. (Deutsche Bearbeitung von W. Meid).
- Morris-Jones, J. (1913), *A Welsh Grammar, historical and comparative*. Oxford, Clarendon.
- Rhys Jones, T. J. (1992), *Teach Yourself Welsh*. London.
- Room, Andrian (1988), *Dictionary of Placenames in the British Isles*. London, Bloomsbury.
- Yoshioka, Jiro (吉岡治郎, 1999), *Dafydd ap Gwilym* の詩注釈 I (神戸海星女子学院大学紀要 38, 1999, 1-22) はか、一連の研究 (ウェールズ語の疑問点について種々ご教示いただきました)。

[以下、括弧内の数字は *Wild Wales* (Collins, 1978) の頁を示す。ウェールズ語は=の次、または、' 'に囲んで英語の意味を付す]

Ab Gwilym, Dafydd (167, ap Gwilym が普通) ウェールズ (Cambria) の生んだ最大の詩人。Cardigan 州 Bro Gynnin に 1320 年ごろ生まれた。彼をもって近代ウェールズ文学が始まる (416)。美青年で、24 人もの美女 (nymph) が彼を得んとて競った (418)。ウェールズの Ovidius, ウェールズの Horatius とともに称しうるほかに、両者にはないものをもっている。それは、キリスト教徒であることだ (420)。彼の後に詩人なし、せいぜい Iolo the bard of Glendower ぐらいのものだ (421)。ウェールズ最大の天才で、世界最高級の詩人の一人だ (438)。その墓のイチイ (yew) の下で Borrow は Gruffydd Gryg の詩 12 行を吟じた (439)。[ap, ab は Mac, Fitz と同じく、息子の意味]

Aber Cywarch (Hemp River, 367)。ここで Ellis Wynn が不朽の詩

Sleeping Bardを作った。Borrowは若い時にこれを英訳した。

Aber Maw (370) Maw河口。

Abertawé (497, Tawy河口) → Swansea

Aberystwyth (392) Cardigan Bayの海岸町。Potosi 鉱山会社の利発そうな青年の出身地。

ael (164) = brow

Afon y Mynach (401) = the Monk's River (その上にかかる橋を monk が作ったから)

Ail i'r ar ael Eryri, Cyfartal hoewal a hi (164) = The brow of Snowdon shall be levelled with the ground, and the eddying waters shall murmur round it.

ale (苦みの強い) 英国ビール。Borrowはaleが好きで、宿屋や、旅の途中でパブを見つけると、よく飲んでいる。Chesterのaleはとてもまずい。cheeseは一口食べたがsoapのようだ(27)。Angleseyのはおいしかった(171)。エッダ(北欧神話の原資料)においては、人間の言葉ではaleといい、神の言葉ではbeerという(242)。FestiniogとBalaの間の店ではおいしかった(254)。BalaのTom Jenkins特製のaleは言葉通りに最高においしかった。Llangollenのaleはウェールズ中で有名だ(257)。BalaのWhite Lion Innで10月に飲んだaleは夏のにくらべてとてもまずかった(356)。Durhamで若い時に飲んだaleがおいしかったので、それ以後、好きになった(405)。Spytty Ystwythで飲んだaleはおいしくないのに one groat (four pence) もするとはひどい(436)。Llangadogで飲んだaleはとても苦く、半分しか飲めなかった(476)。Newportで Irish girl と一緒に飲んだ。彼女は peppermint を飲んだ(521)。^[古いゲルマン語で、デンマーク語など現代ノルド諸語の 'beer' に残る。フィンランド語 olut 'beer' に借用され、リトアニア語 alus 'beer', グルジア語 ludi 'beer' など、印欧語域の周辺地域に残る]
Alit Bwlch (77) 丘の名。high place of the hollow roadの意味。bwlch 'pass' 峠。^[allt 'declivity, grove, cf. altus]

Am hynny hoffais dy gorchymynion yn mwy nag aur (467) Psalm 119 =

Therefore have I loved Thy commandments more than gold.

amaethwr (142) = farmer. [Gallo-Lat. ambactus, Goth. ambahts 召使]

Amserau, Yr [ər əmsère] (66) = 'The Times'. Borrow が Llangollen で
お世話になったガイド John Jones が読んでいる新聞。

Anglesey (154, 別名 Isle of Mona) ここで詩人 Goronwy Owen の郷里
をたずねた (166)。ここのパンはとても健康的だ ('wholesomest',
Black Robin の詩, 192)。この島に詩人が絶えることはない。'Brodir,
gnawd ynddi prydydd ; Heb ganu ni bu ni bydd' = A hospitable country,
in which a poet is a thing of course. It has never been and will never be
without a song (195)。[Anglesey < Qngull (ヴァイキングの名, 北欧
の植民者) の島 (ey) ; ウェールズ名は Môn]

Anglican Church (386, Machynlleth で) 天国へ行ける最良の宗教。
Borrow は英国教会の熱烈な信者。

anialwch (54, 244) = wilderness

appetite (413) 食欲は Borrow にとって最大の楽しみの一つである。天
気が悪いが、ホテルの中にじっとしていたのでは dinner がおいしく
食べられない。散歩にでかけるとしよう。

aqueduct (51) 水道。Llangollen の Dee 川に。ローマ建築の技術がここ
にもある。

Ar eu col o rygnu croch Daranau (283) Milton の Paradise Lost の 'And
on their hinges grate Harsh thunder' (その蝶番の上で激しい雷鳴がき
しるがよい) を Owen Pugh がウェールズ語に訳した。

Arabic (220) Holyhead の市場でターバンを巻いた男とアラビア語で話
した。乱暴なマホメットに捕らえられて、ひどい目にあったそうだ。

Aran Vawr (364, Aran は Arran と綴る) Royal Dyfl (これは king of
rivers だ) の水源。vawr, mawr 'great'

Arran range (369) Arran 山脈。

Av l dir Môn, er dwr Menai, Tros y traeth, ond aros trai (154) = 'I will go

to the land of Mona, notwithstanding the water of the Menai, across the sand, without waiting for the ebb.' 1854年の240年前の詩。その後、Bangor-Anglesey間に通行橋と鉄道橋が建設された。

avanc hen (455) = old crocodile

awdl (30) = ode

awen (108, 201) = muse

Bala (264) 当時人口3000~4000。ホテルの朝食は最高に立派だ。tea, coffee, white loaf and butter, a couple of eggs, two mutton chops, broiled and pickled salmon, fried trout, potted trout, potted shrimps. 御馳走なのに適正な値段だ。(352) 秋に White Lion Inn に立ち寄ったが、夏の ale にくらべて、今日のはまずい。(363) この湖はまるで一枚の広大な鋼鉄 (steel) のように見える。['outlet' (of the Lake to the river Dee)]

Bangor (149) North Wales の中心地、ドルイド (Druid) 崇拝が行われた。Sir John Morris-Jones (Welsh grammar, 1913, の著者、文献参照) が後に Prof. of Welsh at the University College of North Wales, Bangor となったところ。[ban 'high', cor 'enclosure']

Bangor-Anglesey (155) この本土と島を結ぶ吊り橋 (suspension bridge) ほど美しく優雅な橋はヨーロッパにまたとないだろう。

bara y caws (484) → bread and cheese [caws 'cheese' < L. *caseus*, Old Church Slavic *kvasŭ*, R. *kvasu*]

Bar-cluder y Cawr Glâs (222) = top heap of the Grey Giant (Holyhead にある灯台丘の cairn)

Bardd Cwsg [barð kusg] (47) = sleeping bard. 農夫がウェールズ語を読めると言ったので、Borrow がこの本を読んだか、とたずねると、聖書は読んだが、その本はとてもむずかしくて読めない、と答えた。
→ Aber Cywarch [cysgu [k'asgi] < Lat. *quiescere* 'to rest']

Berwyn (450) Tregaron の町にある丘陵の名。

betake oneself (177) ...に赴く。The miller betook himself to the mill.

Borrowにはこのような古風な表現がときどき見られる。この再帰表現は G. sich begeben, F. se rendre などと共通している。

Beth Gelert (237, Gelertの墓) ここのホテルは混雑していて不快だった。(238-239) Gelertは忠実な犬の名。将軍 Llywelyn の息子(赤子だった)を狼から救ったのだが、犬が血だらけになっているのを見て、将軍は犬が息子を食い殺したのだと勘違いして、愛犬を槍で刺してしまった。よく見ると、狼がテントの下で犬と戦って息絶えており、息子は無事だった。犬はまだ息が残っており、将軍が申しわけなかったと謝ると、犬は「いいんだ」と言わんばかりに将軍の手をなめ、間もなく息が絶えた。将軍は見晴らしのよい丘に墓を建て、ていねいに葬った。

Biaidh an taifrionn gan sholas duit a bhean shalach! (508) アイルランドの乞食が言う呪いの言葉。特定の宗派の乞食が用いるという。脚注 p.513。

bi-do-hosd! (36) = (Irish) Be silent!

Blodau Glyn Dyfi (376) = Flowers of Glyn Dyfi. Lewis Glyn Dyfi のウェールズ詩集。Machynlleth の宿屋の娘に何か読む本がないかとたずねたら、この本を貸してくれた。

Bolton (116) ここには英国人と結婚しているウェールズの女性が多い。
[< both! 'building', ton 'town']

bookstall (295, in Llangollen) ここで Y Llywyn Celyn ('The Holy Grove') を買った。Tom o' the Dingle (Thomas Edwards) の生涯と interlude の一つを収めている。

Borrow, George (258) あなたは book-learned gentleman ですなとほめられた。(262) 父親の出身は Norfolk, 母親の出身は Cornwall (ここはケルト語域で, Borrow はここで民話を収集している, cf. William I. Knapp, 1899, vol.2, pp.91-95)。(292) Borrow は drover か horse-dealer と間違えられる。Borrow は馬についても詳しい。(312) You are a person of great intelligence. とほめられた。(314) Llangollen-Wrexham

の途上で Borrow は最高の praise と最低の disdain を受けた。坑夫から「お前みたいな low, illiterate fellow には会ったことがない」と言われた。Borrow 関連は本書全体にわたるので、それぞれの項目に掲載した。

box Harry (182) = have a beefsteak, or mutton-chop, or perhaps bacon and eggs, instead of the regular dinner of a commercial gentleman, namely, fish, hot joint and fowl.....

bradwriaeth y cyllyll hirion (269) → the treachery of the long knives

bread and cheese (484) Borrow はわざと自分が知っているウェールズ語はこの2語 (bara y caws) だけだと言って相手を安心させ、彼らの会話の中身を楽しもうとした。

breakfast (189) I breakfasted and asked for my bill とか after breakfasting... など、動詞に用いている。

British (527) を Borrow は Celtic の意味に用いている。

Bryn y Castell (410) = the Hill of the Castle

bwlch [bulx ブルフ] (87, 363) = pass 峠

Cae Hir (324) = the long enclosure. これは英語はだめだった。

Caer Gybi (213, Cybi's town) Anglesey の町。500 年ごろ Cybi という者がここに college を建てた。貴族も貴族でない者も、若者はみなここに集まった。

Caer-lleon (37) = the city of the legion (Chester のウェールズ名)

[< L. castra legionis]

Caernarvon (162) = the town or castle opposite Mona. Menai 海峡の西端の小さな町。Mona の語頭の m- がケルト語特有の緩音現象 (lenition) により -von となる (ar 'on, upon, over', cf. Gr. *pará*)。

Caer Went (527) 昔はローマの重要な駐屯地だったが、今は寂れた町で、ここではもはやウェールズ語は話されていない。

Caerfili (516) 急いで建設されたので 'Castle of Haste' と語釈されているが、正しくは 'Philip's city' だと Borrow は言う。

calleen (525) = colleen ('girl')

Cambria (529) Wales の自称 [「同郷者」の意味。**kom-brogī* (<**kom-mrogī*. cf. L. margo 国境)]

Cambria's tongue (151) = ウェールズ語。私 Edmund Price (Elizabeth 朝時代, Merionethshire の archdeacon) は8言語以上の偉大な作品を読んだが、ウェールズ語の詩 (24 measures) ほど厳格な歌集 (woof of song) を見たことがない。

Camlas (68) = Canal

Capel Gwynfa (480) = Chapel of the place of bliss. 今 (1854) は3, 4軒の家屋しかない小さな村だが、この Gwynfa という単語は 'paradise' の意味で、Owen Pugh が Milton の Paradise Lost をウェールズ語に翻訳した時に用いたものだということに気づいた。

carn-lleidyrr (57) = heap of stones (= cairn) の意味だが、不正直者、ホームレスの泥棒 (dishonest person, thief without house) の意味に用いる。

Carn Saeson (57) ホームレスのイギリス人 (複数)

Cas Newydd ar Wysk (519, New Castle upon the Usk) = Newport

Castell Cidwm (233) = Wolf's Castle

Castell y Waen (274) = Castle of the Meadow = Chirk Castle

Cefn Bach [ケヴンバツハ] (41) = little ridge

ceiliog y grug (349) = cock of the heath (黒色の鳥)

ceiniog (388) = penny

Ceiniog Mawr (141) = Great Penny (Anglesey), もと鑄造所、のちホテルになった建物。

Ceiriog (63) 川の名。この名は *cerrig* 'rock' より (92)。詩人 Huw Morris が愛した川 (279), 6行の詩あり [*carreg* 'stone', *cerrig* 'stones']

Cerrig y Drudion (129) = Rock of the Heroes

Chepstow (527) 市場 (*chep*, cf. cheap, chapman, G. *kaufen* 'buy') の場所

(stow) の意味。北ウェールズから南ウェールズまで、200マイルの横断徒歩旅行は終わった。ここのホテルには16時に着いた。宿泊はせずに、部屋を借り、best dinnerを注文した。食事までの時間、お城を見学し、Wye 川の水を飲む。この町は美しい Wye 川が高貴な Severn 川と合流するところだ。食事の後、オポルトワイン (port) を飲み、ウェールズの歌をうたい、1等切符を購入し、22時の汽車に乗り、翌朝4時にロンドンに着いた。

Chirk Castle (274) Llangollen 東方のお城。15世紀初頭に建築され、1615年 Sir Thomas Middleton が購入した。[<ケルト語根 *car-* 愛、恵まれた]

ci [ki:] (cwn, 148) = dog [サンスクリット語・ギリシア語・ラテン語・ゲルマン諸語に残る有名な印欧語で、英語の hound にあたる]

clogs (117) の値段。wooden shoes (フランス語 sabot) で、1足 10 shillings → shoes

coch [kox コッホ] 'red' [その soft mutation が goch < L. coccus 'scarlet (colour)']

Codiad yr ehedydd (41, Rising of the lark) ヒバリが飛び上がる。

Coffadwriaeth am Thomas Jones (457) = To the Memory of Thomas Jones (†1830)

colleen (506) = (Irish) girl. calleen と綴る。cf. gossoon

Conway (143) 川の名。編み物をしていた婦人に村の名 (Pant Paddock) と川の名をたずねた。

corn carw (75) = deer's horn. 苔 (こけ) の一種 [*corn* 'horn' < L. *cornū*, *carw* 'deer', cf. L. *cervus*]

Cornish (529) ケルト語の一つだが、もはや話されておらず、本と地名にのみ残るとしている。[例: Penzance < *pen sanctus* 'holy head']

cowydds (420) = cywydd 'poem, song, story' Ab Gwilym が女性たちに向けたことばに軽率な行為はなかった。

Crag y Cefyl (426) = the Rock of the Horse

Craig Vychan (83) Llangollen 近郊の村の名。泉で女たちが洗濯をしていた。

Craig y Forwyn (312) = the maiden's crag 岩が乙女の頭に見えるから、あるいは、失恋した乙女が身投げをしたことから。[*morwyn* 'maiden']

Craig y Gorllewin (342) = the West Crag

Craig yr hyll ddrem (241) = the Crag of the frightful look.

crefydd [krévið] (heathen crefydd, 78) = religion

Crimean War (289) 1853-56 英国・フランス・トルコ連合軍がロシア軍を破った。この戦いでは英国も損害をこうむった。

Croesaw, dyn dieithr (331) = Welcome, foreign man [今は *croeso* と綴る; *Croeso i Gymru* 'Welcome to Wales'] ; Croesaw, gwr boneddig! (439) 詩人 Ab Gwilym の眠る修道院を訪れたあとで近くの農夫と会話をした。

croomb (250) = narrow valley

cross purposes (246) Borrow は詩人 Rhys Goch (Festiniog 生まれ) について知りたかったのだが、相手は何も知らない。ウールズ語も英語も立派に話すその相手は Borrow から英国の Her Majesty について聞きたかった。おたがいに関心が違うのだ (We were from first to last at cross purposes)。

cryd [kri:d] (146, ague [éigju:]) マラリア熱, おこり, 悪寒。Bangor への途中の村 Capel Cuig ではやっていた。

Cumraeg (147, 今は Cymraeg と綴る) ウェールズ語。途中で出会った大工は、イギリス人 (Sais) はウェールズ語を話せないと思っていたのに、Borrow が立派に話すので、驚いた。

Cumro [kámro] (371, Cymro, 複数 Cymry と綴るのが普通) ウェールズ人。Machynlleth への途中のバブで、ウェールズ語で ale を注文したら、給仕がウェールズ人だぞ! と叫んだ。まるで、ウェールズ語の分かる人が来たから気をつけろと言わんばかりだ。[< **kom-brogī* 同郷者]

Cumro (529) ウェールズ人の原郷里 (original home, Urheimat) を

BorrowはSouthern Hindustanと書いているが、これは間違いだ。Cumroはyouth, Gaelはhero, Romanはcomely, Frankはfree, brave fellow, Daneはhonest manなどと語源を述べているが、Gaelを除いて、あやしいものばかり。Romany Chal (ジプシー人) はa lad of Romeの意味としているが、これも誤りで、Romはジプシー語で「人」の意味。

Cumro of the south country (143) 編み物をしていたPant Paddockの婦人がBorrowを「英国人とは知らなかった、南ウェールズの人かと思った」と言った。

Cumro pur iawn (240) = a very sincere Welshman. 借地人が地主 (landlord) のことをほめるのはBorrowには初めてのことだった。

cwrw da [kú:ru dá:] (40) = good ale [cwrw 'ale, beer', da 'good' < L. cerea, ceruesia (Plinius), Sp. cerveza, Pg. cerveja 'beer']

cyfartal [kəvártal] (164) = equal

cyfarwydd [kəvárwið] (427) = storyteller. BorrowがPlylimmonの水源を探究するために雇ったガイドがI am a true cyfarwydd. だから、この水を飲まないでください、あなたの探している水はもっと上にあります、とたしなめた。

cyfoethawg iawn (109, cyfoethog) = very rich, wealthy

Cywydd y Farn (168) = Day of Judgment (Gronwy Owenの主著)

Cyrnigwen (382) Honddu川の近くの丘の上にある美しい建物。Dafydd Gamの邸宅。

Dacw Eryri (162) = Yonder is Snowdon. Borrowは、うっかり娘のHenriettaにウェールズ語で言ってしまった。

Dafydd Gam (382, Gam 'crooked') Owen Glendowerの暗殺者。

Dawn Duw (112) = true genius, Huw Morus (Morris)

Dee (70, 275) 川の名。[この名の川は少なくとも4つあり、ケルト語起源で、サンスクリット語 *dēvī* (女神) と同根だという]

Deepest pool of the river is always the stillest in summer. とウェールズ

の詩人は歌っている。

Deheubarth (319) = Southern Region (of Wales)。私は南ウェールズを見たかったので、Llangollenで妻と娘に別れを告げて、一人で旅立つことに決めた。[*deheu* 'right, south' < **deksowios*, L. *dexter*, Gr. *deksiós*, Goth. *taihswa*]

Devil's Bridge (401) 昔、悪魔がああ橋を作ったのだ。悪魔でなければあんな所に橋など作れるはずがない。

Dewi (455) ウェールズの primate (archbishop)

digon iawn [jaun] (67, 253) = very enough

dim blinder (174) = no trouble. ウェールズの粉屋 (miller) 夫妻に食事に誘われたが、ご迷惑ではないかと遠慮した時に、相手がとんでもない、どうぞ、と言ってくれた。

Dim clywed [dim kləuəd] (372) = I can't hear. Machynlleth で道をたずねたら、相手は耳が聞こえなかった。

dim gair (146) = not a word. 英語は1語も知らない。

Dim Saesneg (103) = I have no Saxon. 英語は知りません。

dinas (367) = fortified city [*din* 'fort', *dinas* 'city' < Celt. **dūnom*, cf. Lugdunum > Lyon, Leiden (Lug はケルトの神)]

Dinas Bran (43) = Crow Castle (bran 'crow')

Dinas Mawr (144) = large citadel [*mawr* 'large' < Celt. **maros*, Gaul. *Sego-maros* 偉大な勝利者]

Diolch i Duw [diólχ i dju:] (111) = Gott sei Dank! (神に感謝あれ)

Diolch iti (41) = Thanks to you.

Dolwen (461, fair valley) 村の名。

dross from the iron forges (503) 真っ赤に燃える鉄くずが溶鉱炉から lava のように流れ出ている。

Drwg iawn (381) = very bad

drink (143) Borrow には部分を表す of の用法が出てくる。I have drunk of it from the little well. (252) I drank greedily of it (ここの水は peat

の味がしたが) cf. G. des Baches trinken 小川の水を飲む, F. boire de l'eau

Durham (405) ここの roast beef は世界一おいしい。ale もおいしかった。

それから私 (Borrow) は ale が好きになった。[< *dūn* 'hill' + *holm* 'island']

dwr santaidd (87) = holy water [*dwr* = *dwfr* 'water']

Dwy Fawr, Dwy Fach (43) = great Dee, little Dee (洪水 Deluge を逃れた2人の人間の名より)

Dyfed [dɔ́ved] (497) Lampeter のある州。

dyffryn [dɔ́frɪn] (164) = valley

Dyffryn Conway (144) = Vale of Conway

dylluan (272) = owl. フクロウの奇妙な、気味のわるい鳴き声は、どんな文字にも綴れない。

Dyn oddi dir y Gogledd (435) = a man from the north country, hee, hee!

北から来たカムリ (ウェールズ人) め、ヒーヒー、フーフー、と Borrow は40人ほどの男女にやじられた。お前なんか Anglesey に帰って羊の世話でもしろ (you are not wanted here!), と。ウェールズ人の閉鎖性がうかがわれる。彼らは英国人に対してばかりでなく、北ウェールズ人に対しても好意をもっていない。

Dyna Llam Lleydir (103) = That is Robber's Leap. 追い詰められた泥棒が、首尾よく急流を飛び越えて逃亡に成功した。

Dyna y gwir verdydd! (105) = That is the right baptism. Llangollen の教区の牧師が、洗礼 (baptism) は水をふりかけるだけでなく、実際に水の中に漬けるのだ、と言って、犬を水路 (canal) の中に投げ込んだ。

eawg (81) = salmon. 雄は cemyw, 雌は hwyfellt という。Borrow はこのような細かい用語も知っており、相手のウェールズ人は舌を巻いた。

efync [éviŋk] (364) = crocodile

Eglwysig (41) 教会の [ラテン語からの借用語; 英語も church に対す

る形容詞はラテン語起源のecclesiasticalを用いる]

eight-and-twenty (121) ‘28’ ドイツ語・オランダ語・デンマーク語式の数詞表現。He might in age be about eight-and-twenty. 現代ウェールズ語はtwenty-one式(英語式)も普通に併用される(Phylip Brake et al.)。ノルウェー語は1951年までone-and-twenty式、それ以後はtwenty-one式となった。

eira (165) = snow [L. *spargere* ‘strew, sprinkle’]

Eisteddfa (429) = the place where people sit down. 三つの別々の方向から来た3人の男がここに集まり、妖精(Tylwith Teg)について論じた。

Eisteddfod of Bards (61), eisteddfodau (268) = sessions of bards 詩人の腕くらべ大会。-fodauは複数形。

englyn (27) = couplet

enwyn (395) = buttermilk. 疲れた旅人からミルク代などもらいたくないと羊飼いの娘がBorrowからお金を受け取らなかった。

Eos Ceiriog (63, 108) ケイリオグ川のナイチンゲール。詩人Huw Morrisのこと。

er cof am (177) = to the memory of

Er myn'd i'r oerllyd annedd... (85) Elizabeth Williamsの娘Jane (†1843) への4行からなる墓碑銘。

Eryri (160) = Snowdon. 北ウェールズの山 (1,080 m) の名。山、湖、滝、森など絵のように美しく、自然がこれほど美しくその姿を現しているところは、ほかにない。(229) Eryriへの途中の美しい谷をまたぐ橋の上に立っていると、まるで天国にいるような心地だ。Eryri, a noble hill called Mount Eilio (229)。[Eryri 鷲の住処 (すみか) < *eryr* 鷲 (わし)]

Esgyrn hirion (389) = Long Bones. 巨人の骨が発見されたためか。

estalom (209, estalwm) < er ys talm ‘long ago’. He came from Llydaw, or Armorica, which was peopled from Britain *estalom*. のようにBorrow

はごく普通に英語の中にウェールズ語をはさんで書いており、彼がいかにこの言語に通じていたかが伺える。

Fairies' well (224) Holyheadの上にある妖精の泉。ウェールズ最良の水だ。そのおいしい水はいくら飲んでも飲み足りなかった。Irelandの詩人MacIntyreが「自然から沸き出るワインよ、蜂蜜のような水よ、シナモンよりも甘い水よ、無料で飲める水よ」と歌っている。

far cake (507) = fear caoch = (ラテン語で) vir caecus (盲目の男) の脚注あり。

farm (200) breakfastと同様、動詞に用いている。I do not farm. I keep an inn.

Father Toban (216) Holyheadで尊敬されている神父。Borrowは船出する少年たちに神父と間違えられて、旅の無事を祈って祝福してくださいと頼まれる。

Festiniog (243, Ffestiniog) 詩人Rhys Gochの生誕地。(429) 宿代はただみたいに安かった。今(2000)はFestiniog Railwayというミニ蒸気機関車が走っている。[ウェールズ語で「防衛地」の意味<ffestin + 形容詞語尾-iog; Festiniogと書くと[vestiniog]と読まれるため、ウェールズ人はFfestiniogと書く]

ffordd newydd (82) = new road [< OE *ford*]

ffrwd [fru:d] (253) = stream [Ir. *sruth* 'stream' < **srutus* 'flowing']

ffynnon (423) = source (of the Rheidol)

fifteen after three twenties (291) = '75'. Pentré y Dwrの老女の年齢をたずねると、ウェールズ語式に、このように答えた。

Finisterrae (222) Galiciaの岬。ラテン語で「大地の果て」

five-and-thirty (405) ドイツ・オランダ・デンマーク式の数詞。I haven't heard it for five-and-thirty years.

four-and-twenty measures (24) 古代ウェールズ詩法。

four-and-twenty miles (501) 今日の旅程は24マイルだ。

Frennig (429) このffrwd (streamlet) がNorth WalesとSouth Walesを

分けている。

Gad roi tro (179) = Let the man take a turn. その男 (Borrow) に曲がるように言え。

Garden of Minstrelsy (300) Twm o'r Nant (Tom of the Dingle) の歌集。
印刷費に52ポンドかかったが、2000部も売れた。

Gelert, Vale of (239) はAlpsやPyreneesのvaleに決してひけをとらない。Gelertは忠実な犬の名 (→Beth Gelert)

Gerniweg (82, Cerniweg) = Cornwall語 (一度は死滅したケルト語だが、1980年代に復活し、学習人口が増加している)。Borrowは自分の先祖の言語と称している。このことわざに「新しい道ができたからとて、古い道を捨てるな」があるという (他の国にもある)。

Gipsiad (77) = Gypsies

Glamorganshire (Swansea) を讃えるAb Gwilymのode (490)。

Glân yw'r gleisiad yn y llyn (81) 湖のマス (salmon-trout) は神聖だ。

私 (Borrow) はこのマスの単語をLewis Morrisの詩で知ったのだった。

gleisiad (81) = salmon-trout (欧州原産のマス)

Glendower, Owen (124) Llangollenにこの名の丘がある。→Owen Glendower

goch [gɔx ゴッホ] 'red'→coch

Gôf Du [go:v du:] (109) = blacksmith

Goronwy Owen (166) ウェールズの最後の大詩人。1722年Anglesey生まれ、Oxfordでギリシア語・ラテン語学者として頭角を現すも、curacyの地位は得られず、Shrewsbury近くのDronningtonで年23ポンド (three-and-twenty pounds) のstipendで副牧師兼文法学校 (grammar school) の校長をした。詩集は1819年にやっと出版された (167)。[Goronwy < *wiro-gnāwios 男として生まれた, L. vir 'man', 人名Gnaeus]

gosson (507) = (Irish) boy ('girl' はcolleen) [F. garçon]

Greaves, John (404) Durham出身で、鉱山会社を経営。minningが最も

高貴な business であるという。その息子は英語もウェールズ語も流暢に話した。

Greek, Modern (535) 現代ギリシア語の *nerón* (水) はなぜ古典ギリシア語の *hýdôr* と似ていないのか。[*nearón hýdôr* (澄んだ水) の名詞の部分省略されたため; *nearón* 'clear' > *nerón*, 現代語 *neró*]

greengage (219) 西洋スモモ。Holyhead の市場で売っていた果物で、世界で一番おいしい果物。18 世紀、英国 Suffolk 出身の植物学者 Sir W. Gage が品質改良したもの。

Griffith ap Nicholas (470) その力と富を歌った 44 行の詩。

Gronwy Owen (175, Goronwy と同じ) あのむずかしい韻律 (24 measures) を読めるようになるまでどのくらいかかったか、との問いに Borrow は 3 年かかった、と答えている。

Gutter Vawr (477, 482, Glamorgan 州) びしょぬれになって目的地の宿屋に着いた。(484) ここの supper は人生のうちで最良の一つだった。veal cutlets, fried bacon, smoking bowl of potatoes, ale も。

gwaen [gwain] (276) = meadow

Gwaith haiarn ym perthyn i Mr. Pearson (491) = Mr. Pearson's iron works

Gwedir Family, History of the (145) 17 世紀初頭, Sir John Wynne 著。いやな隣人たちから逃れるために、肥沃な土地を離れ、岩だらけの Snowdonia に移住した一家の物語。Tudor 王朝時代のウェールズの嘆かわしい悲惨な社会を描いている。

gwehydd [gwéhið] (67) = weaver [cf. L. *vēlum* 'curtain']

Gwen Frwd [fru:d] (395) = Fair Rivulet (*gwen* 'white, fair' は女性形, *gwyn* が男性形)

gwern (117) = alder tree

gwestfa (321) = inn

gwesty (91) = inn, hotel

gwr boneddig [gu:r bonéðig] (85, 197) = gentleman [gwr = L. *vir*]

gwr deallus iawn (321) = a very intelligent man

gwraig [gúrag] (177) = wife

Gwyddeliad (77), Gwyddelians (88) = Irishmen [後者が英語語尾]

gwyn [gwin] 'white', 女性形 *gwen* [< *windos, cf. Vindobona 'white town' = Vienna]

Gwynedd [gwáneð] (319) = Northern Region, North Wales

Gypsy (478) South Walesで偶然知人のGypsyに出会った。BorrowはGypsyの知人が多く、彼らとの交流を描いたThe Romany Rye ('The Gypsy Gentleman', 1857) がある。

Hafod Ychryd (432) Uchtrydの夏の別荘。この邸宅は詩人たちを歓迎したが、火事のためにウェールズ文学の写本の大きなコレクションを失った。建物は再建されたが、図書館の再興は不可能であった。

Hafren [hávren] (= Severn) 川を讀える詩2行 (415)。

handsome captain (266) Sir Alured Clarke (1745?-1832)。王女に恋されたためGeorge 3世に疎んじられ、Indiaに転勤を命じられた。

hen ffordd (82, 110) = old road

Herbert, John (451) 貧しい子供たちの教育に尽くした。1690年没。Tregaron churchに葬られた。

hogs (199) ブタ。英国人はおれたちウェールズ人をみなブタだと思っている。だがおれたちはブタではない。Borrowがaleの代金を払おうとしたら、Angleseyの自称詩人が怒った。

Holy Severn (427) Severn川にはnobleの形容詞もある (527)。

Holyhead-Bangor (221) Borrowは汽車がきらいで、その利用者を軽蔑すると言っていたが、今日は例外で、Llangollenの家族のもとに急ぐために、上記の区間を1等車に乗った。

Houghton, Middleton, Lowton (312) 英国人の姓。高町、中町、下町。ウェールズ語のPlas Uchaf, Plas Canol, Plas Isafにあたる。

How came you into Wales? (152) 疑問文の作り方がドイツ語的。

Hu Gadarn (Hu the Mighty, 455) ウェールズの啓蒙家。文明生活、家

屋の建築、農業、家畜の飼育、ワインと蜜酒 (mead) の製造、作詩などを教えた。

Hughes, Huw (60) Bardd Coch ('red poet') とあだ名された Anglesey の詩人。

Hughes, Jonathan (60) Borrow は 19 歳の時、このウェールズ詩人の詩を暗唱し、32 年後にそれを思い出して暗唱することができた。

Huw Morris (107) Ceiriog (ケイリオグ川) のナイチンゲールと呼ばれ、30 歳になる前に当時の最良の詩人と評された。

I am come to see the birth-place of Goronwy Owen (176) ドイツ語・フランス語式に 'be' 動詞を用いている。同様に I was come to pass the night at the inn (352).

i forwyr da iawn (149) = very good for mariners

iaith diethr (324) = foreign language

In Eden's grove (268) に始まる William Lleyn の 4 行詩。

Iolo Goch の詩 (333) Borrow が少年のころに読んだ詩を英訳して昔を振り返って泣いてしまった。今は 1854 年、もう 40 年近くも前のことだ。

Iolo the Bard (422) の詩。Aed lle mae'r eang dangneff, /Ac aed y gerdd gydag ef. 'To Heaven's high peace let him depart, /And with him go the minstrel art.' 天の高い平和へと彼を旅立たしめよ、そして、詩術も一緒に行かしめよ。

i'r gor-uchaf (58) = the highest [gor- 'on', uchaf < *up-samos, L. *summus* < *s-up-mo-s]

Irish girl (78) Gwyddelod (アイルランド人) は泥棒連中だ。略奪を行いながら集団で放浪している。その一人が仲間からはぐれて路傍に行き倒れになっているところをウェールズ人に助けられ、ウェールズ語を習得し、Methodist と結婚して、立派に社会復帰した。

Irish tinker (520) Turlough という名のいかけ屋に Chester の郊外で出会った。

isaf (290) = lower

lwerddon (119) = Ireland

John Jones (70, 277) Borrowが雇ったガイド(英語は全然知らず、ウェールズ語のみ話せる人という条件で)。無欲・謙虚で、Borrowはすっかり気に入った。第1級の歩行者で、good botanistだった。ウェールズのすべての植物と樹木の名をウェールズ語で知っていた。

Jones (69) ウェールズに多い姓。

Jones the Old (95) 84歳、非常に博識で、教会のladies of Llangollenに認められ、40年あまりclerkを勤めていたが、老齢と目が不自由になったため、自分の店の番をして生活している。

knitting (142) 編み物はウェールズ女性の主要な職業。

Ladies of Llangollen (97) Church of England (Borrowはこの教会の熱心な信奉者)で宣教と住民の啓蒙に尽くした。

Lampeter (458) Church of Englandに奉仕する青年を教育するために、1820年、Bishop Burgessがここにcollegeを建てた。LampeterからLlandoveryへ向かう途中の小さな村には家が6、7軒しかないのに、バブが3軒もあった(458)。[llan + Peter 'St. Peter's church']

leg of mutton of Wales (53) ウェールズのは最高においしい。

Lewis Glyn Cothi (29) ウェールズの詩人。

Lewis Morris (81) 技師、航海家、音楽家、詩人。1700年Anglesey生まれ。Welsh, Cornish, Armoric (Breton語のこと), Highland Gaelic, Irish, Hebrew, Greek, Latinにも通じ、Anglo-Saxonも研究した。

Lhuyd, Edward (433) Oxfordのケルト学者(Celtologist)。RestorationのころHafodの近くに生まれた。(434) Ireland, Western Highlands, Wales, Cornwall, Armoricaをあまねく歩き、ケルト写本を収集し、Oxfordに帰り、1707年Archaeologia Britannica (Celtic dialects)を出版。

II (Welsh) の発音 (23) Borrowはスペイン語のII (Sevilla, maravillaなど)と同じだと言っているが、同じは文字だけで、発音は全く別物で

ある。ウェールズ語のは無声の、すなわち [hl] または [l̥] である。
Llam y Lleydyr (51) = Robber's Leap. 追われた泥棒が首尾よく急流を飛
び越えて逃げおおせたことから、その岩がこう呼ばれた。

Llamfa [l̥ámva] (177) = stile 踏み板

Llan [l̥an] (265) 教会。ウェールズの村は大抵この語で始まる。[ゲル
マン語 land 「国」 ケルト語 *landā, アイルランド語 land, lann 「囲い
地」]

Llan Ddewi Breti (454) 5世紀にここで注目すべき教会の集会が開催さ
れた。Ddewi [ðéwi]

Llanarmon (323) 村の名。< llan-Garmon (Armorica の bishop)

Llanberis (166) Snowdon 山の麓の茶店のある村。ここから頂上まで上
り下りするのに4時間かかる。妻は頂上まで上るのは無理なので、こ
の茶店で夫と娘の帰りを待っていた。[llan + Peris 'St. Peris's church',
6世紀ローマからの宣教師]

Llandovery (465) ここの Castle Inn に宿泊。めずらしく早い時間の宿入
りだ (14:30)。給仕は英語もウェールズ語も流暢に話した。しかし
ウェールズ語を読むことはできない。給仕いわく、紳士たちは外国語
を話すよりも読むほうが得意だ、われわれ貧乏人はその逆だ。外国語
学習に際しての真理の一つだと Borrow は言う。(468) この地名の語
源は Llanymdyfri 'church surrounded by water' [llan-am-dwfr 流れのそ
ばの教会]。(475) 11月10日出発、小さな町だが、ここの滞在はとて
も楽しかった。[記述からはそうも思えないが]

Llanfair [l̥ánvair] (168) Mathafarn Eithaf (Anglesey にあり)、詩人
Goronwy の郷里。Saint Mary's farther Mathafarn の意味。私 (Borrow)
と同じように多くの人が巡礼に訪れますように。[llan + Mair 'St.
Mary's church']

Llangadog (476) = Church of Gadog (5世紀 British saint)。大きな村だ
った。ここのホテルで婦人から Welsh Bible と concordance を見せて
もらった。

Llan Gedwin (330) Sycharth 近くの村の名。

Llangollen (41) 当時人口2000, 'church of (saint) Collen' の意味。ここを Borrow 一家は北ウェールズ滞在の本拠地にする。(265) 家族に再会, その時, 娘の Henrietta はギターを弾き, 私は Havanna (sic) を歌った。(288) Llangollen を讀える Borrow の詩。(318) フィールドワークから夜遅く家に帰り着くと, 妻がほほえみながら, やさしく迎えてくれた。(319) 10月21日, ここから妻と娘は汽車で Great Yarmouth の自宅に帰り, Borrow は南ウェールズの徒歩旅行に出発した。所持金は20ポンドであった。(325) 出発の第1日, Llan Rhyadr への道は沼やぬかるみが多く, 難儀の旅だった。

Llan Rhyadr (326) Llangollen から出発の第1日, 山越え谷越え20マイル歩いて, ここに宿泊した。宿泊客は私一人だけだった。

Llan Silin (337) Huw Morris の生地 (†1709)。

Llan uwch Llyn (357) = the Church above the Lake

lle yr oedd yn sefyll i edrych am ei elynion yn dyfod o Gaer Lleon (125) = where he was in the habit of standing to look out for his enemies coming from Chester

Llewarch Hen (Llewarch the Aged, 359) 7世紀の詩人, 24人の息子の大部分を Saxon 人との戦いで失った。Arthur 王の3人の顧問の一人であったと伝えられる。

Lloegr [pigr] (38) = England のウェールズ名。

Llun Cawr (280) = the figure of a giant

Llun Gwr yw llawn gwir Awen ; Y Byd a Lanwodd o'i Ben. (73) 神は彼の頭にミューズ (詩的靈感) をしみ込ませた, そして彼の頭から彼は世界を満たした。Twm o'r Nant (Tom of the Dingle, Thomas Edwards) を讀えた詩。

Llwyd y Cwn (349) = hoarhound これを飲ませると pwd (羊の病氣) が治る (肝臓の中の worm が死ぬ)。

Llwyn Sycharth (332) = the grove of Sycharth

Llydaw (162) = Armorica [Llydaw, or Lithuaniaとしているが、これは誤り] ; (209) = Armorica, Brittany [沿岸州, ar-mori-ca]

llyn (頻出) = lake, pool [cf. Dublin 'black pool']

Llyn Ceiriog (91) 村の名

Llyn Cwellyn (233) 湖の名 (Eryri)

llyn Tegid (258, 359) = the Lake of beauty (Balaにある)。(359) 細長い美しい湖で、長さ6マイルとあるが、目測でよく測れるものだ。

Llyn Twerin (253) 湖の名。魚がたくさんとれる。

Llyn y Meddwyn (70) = drunkard's pool

Lope de Vega (284) スペインの詩人・劇作家・小説家 (1562-1635)。

Borrowはスペイン語・スペイン文学にもくわしい。

lowering (108) 'looking sullen, threatening' の意味。The morning was lowering [cf. G. lauern ひそむ, 待ち伏せる]

(以下『学習院大学文学部言語共同研究所紀要』24 (2000) に続く。

(ドイツ文学科 教授)